〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (9)〉

二歳児の発達
―トイレタイムにおける自立とその支援―

大戸美也子

現職保育士らとの授業を終えた時、二歳児のクラス担任のFさんが心を決したようにつぶやいた。

「この夏、勝負賭けるわ！」

「二歳児とどんな勝負をするのですか？」

「いえ、あのー、二歳児の夏はオムツからパンツへ変わる大切な時なんです。二歳児のうちにトイレの自立を仕上げなければ…」

内容はあっけないものであったが、保育士が心を決して取り組むトイレの自立支援に大いに関心を深め、その夏、合宿して検討することになった。合宿では、Fさんが撮ってきた二歳児クラスのトイレタイムのVTRの観察から始まったが、思わず引き込まれてしまった。トイレタイムの複雑な過程とその過程にあって悪戦苦闘しつつ前進する子どもたちの様子を見て、トイレの自立は容易ならざる大仕事であると同時に、悪戦苦闘する子どもたちの傍らにいて一人ひとり異なる手助けのために心を砕く保育士の苦労もまた実感できたからである。

トイレタイムにおける子どもたちの動き

FさんのVTRには、二歳児が外遊びから部屋に戻りトイレで排泄を済ませるまでの、子どもたちのさまざまな様子が写されていた。中でも印象的なことは、第一にトイレに向かい排泄を終えるまでに実に多種多様の動きのあることであり、第二にトイレタイムに求められる一

連の行為の理解の仕方、あるいは身体の発達状況や手足の巧みさの違いによって、動きに個人差の大きいことである。まず、トイレタイムで示される子どもたちの多種多様な動きの一つひとつを細かに見ていくと、そこにはいろいろな心身の機能が関与していることがわかる。

たとえばトイレに向かい下着をはずす行為を見れば、尿意や便意を感じ、感じたら向かうべきトイレという場所を認知し、排泄をガマンしながら体を屈伸させバランスを取る全身運動と共に手先の技をも動員している。また、便器を使っての排泄や排泄後の手を洗い・手を拭く動きについても、同様にルールの認識やら手足の操作など、さまざまな能力が発揮されている。そして、トイレタイムの過程におけるこれら一連の行為の一つひとつをちょうどハードルを越えるようにクリアしてこそ、トイレの自立が達成されたとみなされるのである。ちなみに、VTRに現れた二歳児の動きを書き上げ、時系列に沿って整理したのが**表1**である。トイレに向かい下着をはずして準備する第一段階、トイレの中で便器に腰掛けて排泄する第二段階を経て、手洗い・手拭き、そして下着をつける第四段階までに、子どもたちは19のハードル

表1・排泄行為の達成過程に見られるハードル

Ⅰ．排泄の準備
① トイレ（または着替え場所）へ行く
② ズボン・パンツ（おしめ）をはずす

Ⅱ．排泄
① 便器のところへ移動する
② 便器に座る
（適切なポジションに着く）
③ 上着をたくしあげる
④ 排尿・排便をする
⑤ 女児：ちり紙を手でちぎって拭く
男児：なし
⑥ 便器から降りる
流す

Ⅲ．手を洗う／拭く
① 手洗い場まで移動する
② 蛇口をひねる、水の量を加減する
③ 水に手をぬらす
④ 石鹸を付ける〔5箇所洗う〕
⑤ うがいをする
⑥ 水を流す
⑦ 蛇口をひねり水を止める
⑧ 手についた水を切る
⑨ タオル掛けのところへいく
⑩ 自分のタオルで手を拭く

Ⅳ．下着をつける
① 脱いだズボン・パンツを見つけ身につける
オムツをつける

を越えていることがわかる。

ところで、二歳児の夏ごろはトイレの自立にかかわるハードルのすべてをスムースに越える子どもよりも、むしろ「できそうで、できない」というか、「できなそうで、できる」子どもたちのほうがはるかに多い。

たとえば、外から保育室へ戻った後にトイレへ行くという日課は理解できても、すぐに行動に移す子どもばかりではない。帽子掛けの前で帽子のゴムを伸ばした弾みに手が離れてアゴにゴムを当てて泣きだす子ども、帽子掛けの前でおしゃべりに夢中になる子どもたち。トイレの近くの着替えの場所へ移っても、汗ばんだパンツを脱ぐのは簡単ではない。脱いだら脱いだで部屋中走り回わる子ども、パンツのゴムのあたりにあせもでもできたのか、ボリボリかきだす子どももいてなかなかトイレへ向かおうとしない。排泄後に着替える下着をそろえてからトイレに向かうのであるが、衣服を出し過ぎて注意を受ける子ども、ようやくトイレに向かったと思ったらそこで「いない、いないバー」を始める子ども、そうかと思えば興ずる友達をチラリと見てさっさと用を足す子どももいる。排泄を済ませて手洗い場へ移れば、今度は水道の栓のひねり方がいろいろで、辺りに水しぶきが散ってそれがおもしろくなる者、手に水をチョットつけただけで水道から離れる者、せっけんであぶくを立てるのがおもしろくなる者、先生の教えに沿って五か所を丁寧に洗う者など、ここにもさまざまな子どもの姿が見られる。下着をつける場面では、大方は自力でパンツをつけるが、中にはパンツをつけたくないと大声で泣きわめく子どももいる。午睡に備え、布パンツから紙おむつを自らすすんでつける子どももいるが、ピッタリくっついた紙おむつをはがしてこれに足を通すことの何というやりにくさ！

こういう雑踏の中で、パンツに片足を入れた状態で力尽きたように横たわる子どももいて…と、トイレタイムにおけるハードルの越え方の差が個人差を広げ、その結果、身近な大人たちの介入の仕方を難しくしているように思われる。

トイレタイムにおける保育者の困難

子どもたちのトイレタイムにおける保育者の意識を調べるために、次の五項目からなる質問紙を作成し、四つの保育園の92名の保育士を対象に調査を実施してみた。

①手助けの一番必要なトイレタイム
②トイレタイムにおける保育者のチームワーク
③声がけの意図
④トイレタイムのかかわり方で困難を感じること
⑤トイレタイムのかかわり方で嬉しく感じること

表２・手助けの最も必要なトイレ・タイム

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	その他	計
Ⅰ・登園直後	3	1	3	1	0	0	0	8
Ⅱ・外遊びを終えた後	4	13	10	2	1	1	2	33
Ⅲ・室内遊び後	6	5	8	1	0	1	1	22
Ⅳ・午睡前	2	4	8	5	7	1	2	29
Ⅴ・午睡後	9	6	9	2	1	1	2	30
Ⅵ・午後の遊び後	3	2	3	0	0	1	1	10
Ⅶ・その他	2	5	7	4	3	5	2	28
無回答	6	0	1	0	1	0	0	8
計	35	36	49	15	13	10	10	168

表３・トイレ・タイムにおける困難

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	その他	計
Ⅰ・トイレを嫌がる	1	5	5	0	1	0	1	13
Ⅱ・トイレの中で遊ぶ・触る	6	5	0	2	0	1	0	14
Ⅲ・トイレ使用時間の設定　かかわり方	2	5	12	2	4	2	0	27
Ⅳ・トイレの数や構造に問題	2	6	6	12	4	0	1	31
Ⅴ・家族との連携	0	1	2	0	0	1	0	4
回答なし	12	4	3	2	1	2	1	25
計	23	26	28	18	10	6	3	114

表４・トイレ・タイムにおける喜び

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	その他	計
Ⅰ・事前の意思表示	5	5	7	3	0	0	2	22
Ⅱ・排泄の自立達成	9	10	21	6	2	3	3	54
Ⅲ・付随行動の達成	1	2	6	0	2	0	0	9
Ⅳ・事後の報告	0	3	5	1	1	4	0	14
Ⅴ・成長自立に結びついた喜び	0	2	7	3	0	0	0	12
Ⅵ・〈達成〉感情の共有	2	4	3	1	0	0	0	10
Ⅶ・その他	0	0	1	1	0	0	0	2
Ⅷ・無回答	7	4	1	2	5	3	1	23
計	24	30	51	17	8	10	6	146

表中の数字は回答延べ人数を表す（表２～４）

ここでは、①、④、⑤の結果について紹介したい。保育士は、一日のうちでは「外遊びを終えた後」のトイレタイムに最も手助けの必要を感じ、特に二歳児でその傾向が強いことがうかがえる（表2参照）。また、トイレタイムで困難を感じるのは、二歳児の排泄時間の設定の仕方や便器の使い方など排泄時のかかわりであり（表3参照）、うれしく感じるのも二歳児の「自立達成」が際立っている（表4参照）。こうしてみると、二歳児のトイレタイムは保育者が意識的にも実働においてもかかわりが多く、まさに「勝負を決める」時とみてよいのかもしれない。

トイレの自立支援のあり方―最接近領域に気づく

子どものトイレの自立形成のための大人の働きかけは、しばしば「トイレット・トレーニング」とか「排泄の習慣形成」と称され、保育者がイニシアチブを取って「随意的に排泄していた状態から、尿意を知覚して随意に排泄するためのトイレ誘導を積み重ねていくこと」の重要性が指摘されてきた（帆足　一九九五）。しかし、二歳児では、トイレタイムにかかわる一連の動きを理解し、実際に自らの力でそれらの動きを作り出すこともできる。部分的にある動きに戸惑ったり何度も繰り返したり、また逆に飛ばしたりして、自立達成に一歩及ばない状況にある。このような場合、保育者をはじめ大人はどのように自立支援を進めていったらよいのだろうか？

たとえば、保育者の次のような介助をした後、子どもたちが自ら進んで『その次の動き』を作り出している姿を目撃する時、大人の一部介助が子どもの自立達成の足場を用意する働きをしていることがわかるのである。

・トイレの中から助けを求めている時助けに応ずる。

・手の汚れを洗うのに夢中になって、水道の栓を次々

に開けて洗う時、使わない水道栓を閉める。
・排泄後、ズボンを自力でつけているが、ズボンが窮屈で腰骨の所を通過させているのに苦労している時ズボンを吊上げる手伝いをする。
・紙おむつをつけやすいように広げる。
・靴下を探しても見つからず、先生に「ない」と訴えにきた時、ポケットからはみ出ている靴下を見て「ポッケに入っているよ」と指摘する。

子どもたちがトイレタイムにかかわる動きを了解し、その一つひとつをこなしつつも、難儀し助けを求める動きに対して援助することは、必要であり大切である。子どもの自立は子どもにすべてを託すことでも、大人の路線に誘導することでもなく、子どもが「できそうで、できない部分」に大人が気づいて補い、協働していくことが肝心である。

二歳児を含む幼児期前期は、それまでに獲得した身体の生理的感覚、体全体や手足の巧緻性、コミュニケーション能力、相手の求めを察知する対人認知力、課題解決に必要な洞察力などを駆使して、食事、排泄、衣服の着脱などの「身辺の自立」に向けて大きな一歩を踏み出す時期である。それだけに大人は、習慣化してしまえば単純に見えるこうした行為も、実はさまざまな心身の働きが関与する総合的学習活動であることを自覚し、子どもが自らの力で進めることのできる部分や技を限りなく尊重しつつ、自立達成に寄与する最小の介入の場所（最接近領域）を明確に意識していくところに『身辺の自立支援の鍵』が隠されているといえる。

（幼保プロジェクトメンバー・お茶の水女子大学）

参考文献

大戸美也子・他「二歳児の発達と学び～排泄行為の自立形成期における支援の指標を探る」（日本保育学会第60回大会発表論文集、二〇〇七）
帆足英一「排泄の習慣形成」、岡田正章・他編『現代保育用語辞典』フレーベル館、一九九七